

日本イギリス哲学会 第48回 関西部会例会

日 時：2013年 7月20日（土）13：00～17：40

場 所：キャンパスプラザ京都 京都大学サテライト講習室（6階・第8講習室）

交通アクセスは裏面の図でご確認ください。

報 告 1：13：00～14：25（討論を含む）

報 告 者：甲田 太郎（京都大学大学院 経済学研究科博士後期課程）

題 目：マンデヴィルとシャフツベリの相互関係—類似の中の差異—

報 告 2：14：40～16：05（討論を含む）

報 告 者：嘉陽 英朗（甲南大学 非常勤講師）

題 目：16-17世紀ブリテンにおける技術・発明・特許

報 告 3：16：15～17：40（討論を含む）

報 告 者：桑島 秀樹（広島大学 総合科学研究科）

題 目：渡英以前、ダブリン・トリニティ・カレッジ期のバークの〈交遊〉と〈感性〉
—『改革者（*The Reformer*）』刊行に至るまでの精神的遍歴—

なお、各研究報告の要旨は、添付の別紙をご覧ください。

例会の後、簡単な懇親会を予定しております。こちらにもどうぞお気軽にご参加ください。

また、12月（予定）の部会報告をご希望の方は、以下の担当者あるいは事務局までお申し出ください。

関西部会担当

久米 暁（関西学院大学、exkume@kwansei.ac.jp）

竹澤 祐丈（京都大学、Takezawa@econ.kyoto-u.ac.jp）

（◎を@にお直してください）

<会場案内>

キャンパスプラザ京都 京都大学サテライト講習室（6階・第8講習室）

〒600-8216 京都市下京区西洞院通塩小路下る

（ビックカメラ前、JR 京都駅ビル駐車場西側）

TEL 075-353-9111



＜日本イギリス哲学会 第48回関西部会例会 報告要旨＞

報告 1：マンデヴィルとシャフツベリの相互関係―類似の中の差異―

甲田 太郎

バーナード・マンデヴィルは、経済学の発展系譜に関心を置く経済学史においてはアダム・スミスに代表される利己心を肯定する経済学の源流として位置づけられることが多い。しかしながら『蜂の寓話』においてマンデヴィルは、同時代人第三代シャフツベリ伯爵の社会観に対する論駁を目的の一つとしている。発表者は、経済学史の問題関心からではなく、18世紀初頭に関する思想史的な関心から、経済学的観点に留まらないマンデヴィル像の構築を目指したいと考えている。

その手始めとして本報告では、二人の思想家の間の関係性を再検討する。すなわち経済学史における研究では、両者の相違点が強調されがちだが、私の見るところ、共有部分も存在している。したがって両者の共有と相違の双方を踏まえた上でのみ、より本質的な比較が可能になると考える。概略として、両者は道徳と宗教の分離という点では共通し、また個人が社会的利益に向かうことで結果的に自己利益を手に入れると主張する点で類似していたが、道徳の役割と、宗教の影響に関する見解とが異なっていた。本発表は両者の一次文献に今一度立ち返り（特に二重の意味を含みがちなマンデヴィルの皮肉に満ちた表現は、その都度検討の必要がある）、議論の共有部分を再確認しながら、差異が生まれた原因を探りたい。

（京都大学大学院 経済学研究科博士後期課程）

報告 2：16-17世紀ブリテンにおける技術・発明・特許

嘉陽 英朗

16-17世紀、王朝交代期前後のブリテンでは、生産技術および生産力において、大陸諸国に追いつくための「新産業」が奨励されるなかで、幅広い適応範囲を持った国王大権「特許」や、単なる「独占」から、現代広く知られていて重要な役割を果たしている、技術と発明に関する「特許」の概念と制度、そしてそれに伴う、新しい「発明」や「新規性」の概念が、芽生えつつあった。

本報告では、ブリテンにおける、この新しい「特許」をめぐる思想や制度のはじまりと萌芽期の展開について、世紀転換期に活躍した、この時代もっとも有名な「発明家」の一人ともされるサー・ヒュー・プラット（Sir Hugh Plat, 1552-1608）の活躍と、その発明への特許取得における「不運」なども交えながら、検討を行いたい。

（甲南大学 非常勤講師）

（裏面に続く）

報 告 3：渡英以前、ダブリン・トリニティ・カレッジ期のバークの〈交遊〉と〈感性〉
—『改革者（*The Reformer*）』刊行に至るまでの精神的遍歴—

桑島 秀樹

本報告は、大ブリテンでの政界登場以前の「初期バーク」にかんする伝記研究の一部であり、ことに若きバークの美学的＝感性論的思考の痕跡を探ることを目的とする。具体的には、在アイルランド期＝生誕の 1729 年～ロンドン渡航の 1750 年—のうち、1740 年代後半のカレッジ期におけるバークの精神的展開を追うことになる。この時期のバークの日常を知る資料としては、主として、キルデア州バリトアのクエーカー寄宿学校以来の親友 R・シャクルトン宛書簡が残っている。

報告ではまず、シャクルトン宛書簡の分析から、バークにとって生涯を通して重要であった二つの交遊関係—「コーク＝カトリック・コネクション」と「バリトア＝クエーカー・コネクション」—を指摘したい。カレッジ期後半には、新たな「ダブリン＝カレッジ・コネクション」が前景化するように思われる。このような交遊圏の拡大・複層化は、すでに渡英以前の段階で、バークを公的に「美学者」たらしめるのに役立ったであろう。報告の最後に、週刊誌『改革者』（1748 年）の刊行へと結実する、若きバークの魂の遍歴過程を仔細に示せば、と思っている。

（広島大学 総合科学研究科）